

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鏡の間
Author(s)	葛西, 琢也
Citation	児童の言語生態研究 , 13 : 92 - 93
Issue Date	1988-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045151
Right	
Relation	



鏡の間

報告 聖徳学園小学校教諭

葛西琢也

聖徳学園小学校二年

(担任 由里敏夫氏)

うめぼし

うめぼしって

なぜしわがよってるか、わかった!

おばあちゃんのおうちから

もらって来たからだ!

たべると私のおおにも

しわがよった。

きょうだい

子もやししゃもをたべていたら

ふとかんがえただけど

さかなの一人っこっているのかな?

このたまごが、みんな大きくなったら

すごい大かぞくになっちゃうね。

でもいいなあ!

おふろ

おふろってどうして

一日のつかれがとれるのかな?

汗といっしょに

つかれもながれるからかなあ。

ながれたつかれは

どこへ行くんだろう。

おふろにつかれがたまつて、かわいそ

う。

お日さま

ママのおてつだいをし

おせんたくものを

たたんでいたら

お日さまのおいがした。

よるにほしたら

お星さまのおいが

するかしら?

朝と夜

私が朝、パンとミルクを

おいしくたべるとき

世界のどこかで

おねしょのまっさい中の子が

いるかしら?

(以上一年 昭和六十一年度)

お母さん(一)

お母さんて必らず

子どもをおこるものなの?

「いい子だったら別に起こらないんじゃない。」

とママはいったけど、

もし私がとってもいい子だったら

「もう少し悪い子になりなさい」って

いって起こるんじゃない?

お母さん(二)

私がお母さんになった時の

ことをこれから考えてみよう。

子供が朝、なかなか起きなかつたら

………?

困る

野菜をあんまり食べなかつたら………?

困る

お手伝いを全然しなかつたら………?

うーん 困る
ママの苦勞がよくわかった。

夕焼け

今日もきれいな夕焼けが
ベランダから見えた
まんまるでオレンジ色の夕日が
富士山の後に
重そうにしないでいく。
しずんでしまうのがもったいなくて
ワット大変

お空にのりではって！
セロテープでとめて！！
ガムテープの方がよくくっつく！！
なんてさわいでいるうちに
とうとうすっかり見えなくなった。

でもその後の空は
ピンクやブルーやむらさきが
まぎって、とてもきれいだった。
けやきの木に止まった大ぜいの鳥たち
も
いっせいにそちらをむいて
うっとりとながめていた。

(二年 昭和六十二年度)

聖徳学園小学校

(担任 由里敏夫氏)

才腹ノ中ノ超

海ノ中

ユラサレテ
橋ニカカッテ

タスカッタ

ソノトキマタ大波ガキタ

ドンドン波ガキテ

ガマンガデキナクナツタ

ソノトキマケナイ気分ヲモッタ

ソコアテチョウド

出口トカイテアルカンバンガアッタ

イツカハソウイウ日ガ

アルト思ツタ

デモソノ出口ガ

アクマデ

ズーッとマッテイタ

月の顔

月に顔はあるのだろうか

もちろんあるにきまつている

僕はちゃんとこの目で見た

僕が笑うと月も笑う

僕がガミガミおこると

月もガミガミおこる

この月には

深いわけがある

そのわけを考えたい

僕はこう思う

この月には

魂があるのではないか

そうにちがいない

それに

顔があるのは月だけじゃない

雲やお日様にも顔はある

人間にも顔がある

動物にも顔はある

世界にも顔はある

この地球で

顔がない所は一つもない

宇宙にだって

顔がない所は一つもない

生きている所に

顔がない所は一つもない

顔はみんなのたましいだ

(以上一年、昭和六十一年度)

心の風景

僕は一人で

電車に乗るのが好きだ

一人で電車に乗っていると

自分だけの世界に

いるみたいだ

景色がみんな

自分の心に見えてくる

心と魂

いくらだれかが

死んだからといって

何も残らないとは言えない

けれど

残るのはただ

心と魂の二つだけ

死んで心と魂が残らない人は

地獄に落ちた人

生きている間に悪い事をした人

死んでからの世界というのは

心と魂の世界

心と魂

それはただ人の悲しみの気持ち

そして

人が死んで行くのに

一番大切なもの

鏡の中

鏡の中の世界に

行った人がいるだろうか

それはいないはずだ

けれど

鏡の世界は有るにちがいない

その鏡の世界で

何かが生きているはずだ

だから絶対

鏡の世界に行けるはずだ

夢の夢の夢

ずっと先の夢に行けばいい

(二年 昭和六十二年度)